サミュエル・ジョンソン――『ラセラス』論（1）――

石　井　善　洋

（受付　2017 年 10 月 30 日）

『アビシニアの王子，ラセラスの物語』[1]（1759）のテーマは，冒頭にこのように記されている――「汝ら，空想のささやきに騙されやすく，希望の幻影を夢中で追いかけている者よ，齢が若き日の約束をかなえ，今日の不足が明日は満たされると期待している者よ，聞け，アビシニアの王子，ラセラスの物語を」[2] と。その言わんとするところは，あてのない空想をたしかな希望と信じ，つぎつぎに対象を変えて追いかけていく人，あるいは為すことなく幸運を待ちつづけて，人生を空しくすごす人の愚かさを諭すことである。

ここを読んだ読者は，主人公の王子ラセラスが，はじめは空想に惑わされても，「幸福の谷（Happy Valley）」をぬけだしてさまざまなことを見聞し，やがて人生の迷いに気づいて，最後は立派な為政者になるはずだと思いながら読む。ところが，結末に至ってどう受け取ってよいかわからず，戸惑うことが多いようなのである。アビシニアに帰ると決めたラセラスたちの将来が暗い虚しさを滲ませているのか，ラセラスは最後まで空想に騙されていたのか，そもそも『ラセラス』は何を描いていたのか，という古くて新しい疑問に終章は改めて立ち返らせる。

『ラセラス』を「幸福の探求」という視点で論じた研究は多いが，冒頭にあるように「空想と希望」という観点で論じているものは少ないようである。小論の前編では，その主題を「空想と希望」とした上で，作品に内在する軌道と推進力という点から，全体の解釈の枠組みを明らかにし，終章の読み方について論じたい。

1. 「幸福の谷」が語ること

「幸福の谷」は『ラセラス』の枠組みを見極める上で重要である。「谷」の構想が終章の読み方をほぼ決定しているからである。

1）原題は *The History of Rasselas, Prince of Abissinia*。以下『ラセラス』。

2）原文は以下の通り。'Ye who listen with credulity to the whispers of fancy, and persue with eagerness the phantoms of hope; who expect that age will perform the promises of youth, and that the deficiencies of the present day will be supplied by the morrow; attend to the history of Rasselas prince of Abissinia.'

ラセラスは，王位継承の日まで，アムハラ王国の山中深い「幸福の谷」で暮らすことになっていた。「谷」は季節の変化が美しく，自然の恵みがゆたかで，食料に困るようなことはない。居城の王子たちは何不自由なく暮らせるように，幾人もの官吏に世話をされ，あらゆる種類の娯楽を楽しんでいた。

「幸福の谷」とはいえ，その内実がいかなるものか示唆的な文章が多い。宮殿は，「まるで猜疑心そのものが設計を指示したかのような構造」（第一章）で，どの部屋にも秘密の通路がもうけられている。王は年に一度の祝祭に，国中からさまざまな娯楽の技にたけた者を呼び集め，その芸を披露させる。そして選ばれた者だけが「幸福の谷」に住むことが許された。しかし，祝祭は，「生活を愉快にし」，「うつろになった注意を呼び覚まし」，「退屈な時間を紛らす」（第一章）ために行われていた。またいったん門をくぐった者は二度と帰ることが許されなかった。住民は表面的には幸福そうであるが，心は何かに蝕まれている。にもかかわらず，アビシニア王の子女たちは，「谷」の外は不和反目がはびこり，人が人を食い物にしている非道な世界だと教えられ，「谷」に住む幸福をよろこんでいた。彼らにとって「谷」はその名のとおり「幸福の谷」だったのである。しかしそこに一人だけ楽しまない人物がいた。ラセラスは贅沢な料理にも，みやびな音楽にも，城内の社交にも嫌気がさして，物思いにふける。

第三章「不足なき者の不足」に幸福に関する議論がある。かつてラセラスを教えた老教師が，「殿下が不足だと感じておられるもので，満たされないものとは何でしょう。もし満たされないものがないとすれば，どうして不幸であり得ましょうか」と問う場面がある。老教師がいう幸福は，物質的な意味でも精神的な意味でも，「満たされる」ことである。そこに示唆されているのは，「幸福の谷」では満たされないものはない，幸福は自分で勝ち得るものではなく，すでに与えられているものだということである。それに対してラセラスは，「何も不足がないこと」，「自分が何をもとめているのかわからないこと」が「不満の原因」だという。「はっきりとわかっている不足」，「特定の願望」があれば，その「願望が努力をうながす」。「何か追いもとめるものがあれば幸せになれる」だろうに，すべてのものを所有しているため，毎日が退屈でしかたがないと。

ラセラスはあふれるような力を自覚して，それをぶつける対象を欲している。彼が言おうとしているのは，幸せの因であるはずの，希望とは何かである。つねに満たされていることが幸福なのではない。満たされていなくても，「何か追いもとめるもの」があれば幸福だという。それは，能力，発想，自由を含意するからである。自分が認め，人にも認められる行為，幸福にいたる行為を自分の目で見出し，自分の手でやり遂げることだからである。すなわち，希望とは，幸福になれるという積極的な期待である。よって希望を抱いていること自体，幸福なのである。つねに満たされていることは，希望を排除することに等しい。

希望の対象である「追いもとめる幸福」と，老教師がいう「満たされる幸福」は，一見異

質のようであるが，実はまったく無縁なものではない。希望を「追いもとめる」こと自体，「満たされる」ことの一部なので，どちらも幸福の一面である。「満たされる幸福」は現在に，「追いもとめる幸福」は，希望という形で，主に未来に関わるものであるが，真の幸福はその二つがそろって完全なものになるはずである。しかし，重要なのは，ジョンソンがこの二つの幸福を分けて，相容れないものとして，「幸福の谷」を構想したことである。その結果，ラセラスは「満たされる幸福」を除外し，「追いもとめる幸福」を真の幸福として受け入れる。これが物語の軌道となり，もとめつづける物語が生まれ，ひいてはラセラスの性格を方向づける。物語の枠組みはこのようにして準備される。

王子の意外な悩みに当惑した老教師は，「世の中のさまざまな不幸をご覧になれば，今がどんなに恵まれているかおわかりになるでしょう」ともらす。そして，ラセラスは，自分の幸福を知るために必要であるなら，ぜひとも外界の不幸を見てみたいと願う。ここでラセラスは，はじめて「谷」から出たいという明確な願いを得て，瞳が輝きはじめる。また，外界を意識したことで，行動に変化が生じる。

ラセラスは老教師との面会後，内面の変化に気づかれないように，すすんで城内の社交に参加した。自分では飽き飽きしている世界で，つとめて楽しそうにしていた。夜になると，まだ見ぬ世界を想像した。人々を救い，不正を暴き，圧政をくじく自分のすがたを思い描いて，胸を躍らせていた。すると，人生の重荷が軽減され，しばらく孤独を忘れてしまうのである（第四章)。この箇所は，希望が空想と区別しがたいこと，空想に幸福をもたらす一定の力があることを物語っている。これは作品のテーマと無関係ではない。

また，ラセラスは，ある日，幻覚をみる。今恋人にわずかばかりの財産を奪われ，泣き崩れる娘をありありと眼前に見た。彼は奮い立ち，悪党を追いかけ，もう走れなくなる山の麓まできてわれに返る。これをきっかけに，ラセラスは「谷」から出たいという願いを得ながら，二十ヶ月無駄にすごしてしまったことを猛省する。しかし，無駄な決意にこれ以上時間を失うまいと決意しながら，さらに四ヶ月をすごす。そしてようやく行動を起こそうと思い立つのである。「私は，大地の戒め，星たちの教えにもかかわらず，いつまでも空想にふけっていた。二十ヶ月はすぎた。だれがとりもどせようか！」（第四章)。この科白にあるように，「谷」を出たいと願ったときから，ラセラスの心を占めていたのは空想である。空想は自分が望む世界が頭のなかで跳ねまわる夢幻の世界である。主観的には幸福かもしれないが，客観的には事態は一歩も進展しない[3)]。まさしく，「汝ら，空想のささやきに騙されやすく，希望の幻影を夢中で追いかけている者」を表している。しかし，幸いに，ラセラスはこの陥穽を

3）ジョンソンは *Dictionary* で「空想」（fancy）をつぎのように定義している。‘An opinion bred rather by the imagination than the reason.’ ‘False notion.’ ‘Something that pleases or entertains without real use or value.’

自覚した。

空想にふけっていたと気づいてからは，ラセラスが理性に目覚めた期間といってよい。二つの挿話がそれを表している。ラセラスは山中に洞窟や抜け道がないかどうか調べはじめる。十ヶ月費やして，結局，出口はないとわかったが，彼はその過程でさまざまな動植物の本能と特性を発見し，もし「谷」から出ることができなかったら，「驚異の自然を観察することで自分を慰めるつもりになった。そして，彼の努力は，まだ実を結んでいないが，汲めども尽きぬ探求の泉に恵まれていることを喜んだ」（第五章）と，冷静に自分を見つめ，「谷」の中ですべきことを見出している。

もう一つは，さまざまな機械類を考案し，「谷」の生活の便宜に貢献していた工の，人間は空を飛べるという飛行実験の挿話である。ラセラスは期待しながらも批判的に眺めていた。「どうやら，あなたは，想像力のほうが技術を上回っているようだ。いまあなたがいったことは，知識というよりは願望というべきではないか」と言い，工の「もし圧力によって空気が退くのであれば，それよりも速く空気に衝撃を加えてやりさえすれば，人間は間違いなく宙に浮いていられるはずです」（第六章）という飛行術を懐疑的に聞く。工の，コウモリの翼を模した飛行実験は，いうまでもなく失敗したが。この実験はラセラスに僥倖をもたらしていたかもしれない。が，彼は感情の高ぶりを抑え，冷静を保っている。

飛行実験の後で，ラセラスは目的を秘めながらチャンスを待つようになった。また仮に目的が達成されなくても，動物学，植物学に身を捧げようと，人生の計画を立てることができた。つまり，「幸福の谷」にも希望があったのである。「谷」を出ることがまったく不可能なことから，ラセラスは夢に溺れ，果ては幻を見る。可能性には障害がつきものである。また自ら目を閉ざして障害をつくってしまう。「幸福の谷」では，空想と理性，障害と可能性の関係を描きながら，実は，合理的な希望を導きだすヒントも描かれていた。問題は，「谷」という環境ではなく，意識のもち方と環境への肯定的な働きかけにある。まだ「社会」という観点が欠けているのは確かだが，足元を見れば「谷」の中にも幸福の萌芽はあった。ただ，ラセラスは，「谷」を出たいという圧倒的な願望のために，この事実を見ていない。

ラセラスは王子であるにもかかわらず，帝王学が施されていない。国民の真の生活を知らされていない。それどころか，その点については故意に欺かれている。ラセラスがいつしか立派な国王になるためには，多くの事柄，真実を学ばなければならない。しかしそれは「谷」の中にいては覚束ない。彼は「谷」をぬけだして，自ら学ぶ必要がある。そこで読者は彼の人間的な成長と最終的な幸福を期待する。終章の理解に必要なのは，この読者心理の存在である。その維持のためにラセラスがすることは，敷かれた軌道を走ることである。すなわち，足元を見ずに，希望を遠くへ，未来へ求めようとする。休むことなく「追いもとめる」ことがラセラスの役割となり，作品の枠組みをつくる。終章での読者の困惑は，彼の行動に変化

がなかったからだが，テーマ上，変化はないはずである。「幸福の谷」が構想されたときから，作品の力学は読者の期待とは別な方向を向いているからである。

2. 「人生の選択」の可能性

「追いもとめる幸福」の行方を知るためには，ラセラスの師となるイムラックの役割を見なければならない。ラセラスは城内の祝祭後，詩人イムラックと出会う。その物語の才と，ゆたかな経験，知識に触発されたとき，ラセラスは彼を師とし，「谷」を出て，いかにして生きるべきか，いかなる生き方が幸せか，「人生の選択」（the choice of life）をしたいと決心する。これ以降，希望は「人生の選択」という別名で呼ばれることに注意する必要がある。

ゴイアマ王国の商人を父として生まれたイムラックは，幼いころ知識を得るよろこびに目覚めた。商人にするつもりしかなかった父から，商売の元手に金貨一万枚を受け取った後は，スラット，アグラ，ペルシャ，アラビア，パレスチナ，アジア諸国を遍歴して，詩人になりたいという夢を実現するために，様々な知識をもとめた。その後，望郷の念にかられ，カイロ，スエズをへて，二十年ぶりに帰国した。しかし仕事は思うに任せなかった。旅先では各地で王侯貴族の知遇を得たが，祖国では受け入られず，開いた学校は教育が禁じられて，閉校の憂き目を見た。また，父が商人だったという理由で，理解者である女性とは結婚できなかった。そしてとうとう「幸福の谷」に終の住処をもとめたのである。

イムラックの旅の結末を考えると，各地でその博学と雄弁がもてはやされていた彼が，なぜ祖国では冷遇されたのか，少なからず疑問をいだく。イムラックを「幸福の谷」に住まわせる意図があったからだとはいえ，これでは「知識のために捧げた一生」（第八章）が無駄であったという，決して軽視できないメッセージをのこすことになる。さらに，「谷」からの脱出に成功したとき，「イムラックは外に出たことをとても喜んだが，世の中の楽しみにさほど期待していなかった。彼は前に試したことがあって，飽き飽きしていたのだ」（第十四章）という文，（イムラックは，王子に）「甘美な幻想を抱くままにさせておいた。経験のなさが生み出す希望を打ち壊すのが忍びなかったからだ」（第十六章）という文，さらに，（イムラックは彼らが）「いとも簡単に励まし合っている姿が微笑ましかった。自分も若い頃はまじりっけのない幸福を確信し，自分を慰める手段に事欠かなかったことを思い出していた。そのうち嫌というほど味わうことになるのだから，彼らに要らざる知恵を授けるのはよしにした」（第四十五章）という文を見ると，この旅の意味が疑わしくなる。ラセラスの「私はお前が見てきた世界を見たいのだ。私の試みがどう終わろうと，私は自分の目で人間のさまざまな生き方を判断し，その上で慎重に自分の『人生の選択』をしたいのだ」（第十二章）という旅の結末は，はじめから見えているといわざるを得ない。つまり，イムラックが担っている役割

は，ラセラスに現実の世界を見せ，「人生の選択」に見込みがないことを悟らせることなのである。にもかかわらず，「選択」の物語が破綻しないのは，物語の軌道に加えて，二つの力が働いているからだと考えられる。

3. 二つの推進力

a. 人物描写

一つは，「谷」の内外の人間の否定的な描き方である。イムラックは「希望と恐怖に別れを告げるべく」（第十二章），永遠の幽閉生活，「幸福の谷」に身を投じた。ところが，イムラックの同朋の見方はきわめて辛辣である。彼の説明では，意識の内容はほとんど過去と未来でしめられていて，喜びと悲しみは過去から，希望と恐怖は未来から生れる（第三十章）。「谷」の住人は，「谷」に移り住んだことを心から悔いているから（第十二章），回想からは悲しみしか得られない。また何の希望も与えてくれない「谷」の生活に，未来への期待はない。ゆえに，住民は，「今という瞬間のほか心になんの印象もないから，悪意で心が蝕まれているか，永遠の虚無の闇に呆然と座っているか，いずれか」（第十二章）である。「谷」は過去も未来もない，現在だけの異様な世界であり，そこに住んでいる人間は，およそ人間とはいえない劣等な状態にある。

ところで，人間から過去と未来を取り除くと，悪意と永遠の虚無しか残らないという見方は，論理の問題としてはありうるかもしれないが，少し極端ではなかろうか。物語の人物造形として果たして適切なのか疑問が払拭しきれない。一種の妄想に取り憑かれ飛行実験に失敗したとはいえ，数々の発明に意欲を燃やしていた工と比べ，他の住人の描き方は偏っていないだろうか。精神的な丸みをもたない，紙細工のような人間の異様な面だけが描かれているという印象を禁じ得ないのである。そのような描写は物語の展開に寄与しないはずである。つまり，この描写の実質的な効果は，「谷」の異常さを強調し，ラセラスが「谷」をぬけだす正当性を読者に印象づけることにあると考える方が妥当である。閉塞した環境における偏った人物造形は，人間的な深さを描くためというよりは，物語を一定の方向に向かわせる推進力の役割を果たしている。

ラセラスが「谷」の外で出会った人々についても同じことがいえる。いかなる生き方が幸せか，「人生の選択」の参考にするにしては，彼らも一面の真実しか取り上げられていない。以下，箇条書きにまとめる。

若さこそ幸福の源なのに，破廉恥な生活をつづけて，青春を徒らに謳歌している若者たち（第十七章），愛娘を亡くした道徳の教師の，理性を失った，人目をはばからない悲嘆（第十八章），古来詩歌に歌われてきた人たちとは思われない，無知で嫉妬深い羊飼い（第十九章），

富に恵まれているとはいえ，権力者の横暴につねに怯えている宮殿の主（第二十章），隠棲に幸福を見出せない隠者（第二十一章），不毛な議論を戦わせて酔いしれている識者（第二十二章），万人に尊敬されうる立場にありながら，互いに憎み合い，監視密告を恐れている高位高官（第二十四章），慰めのない老いの心境（第四十五章）など，見かけと真実がかけはなれていることを，ラセラスはイムラックの案内で学ぶ。

確かにありがちな人間像である。しかし，一例をもって，ある年齢層，職種，境遇全体に幸福はないと結論している。真に人間的な人物もいなければ，意識のもち方，環境への肯定的な働きかけという観点で，幸福を正面から論じている箇所もない。

第二十三章で，ラセラスと妹のネカヤは，富者と庶民の生活を分担して調査することに決める。しかしネカヤの報告は，軽薄な見栄，嫉妬，恋に現をぬかしている娘たちの生活，見た目と違って不和を抱えている家庭（第二十五章），親子の対立し合う家庭（第二十六章），結婚の是非（第二十六章，二十九章），善人に保証されない幸福（第二十七章）等々，一面的，否定的な観察に終わり，答えのでない議論へとつづく。ラセラスは「きっとお前は，知人に恵まれなかったにちがいない。親子という最も愛情深い関係が，どうにも避けがたい動機で断絶しているとは，私は信じる気になれない」（第二十六章），お前は「人生を偏見の目で見ていて，ありもしないところに不幸があると思い込んでいる」，「お前の話を聞いていると先行きが暗くなる」（第二十七章）と批判する。

ネカヤの報告に真実がないとはいわない。しかし，ここにある人間性の記述は，ラセラスの指摘どおり，一面に偏りすぎている。その一連のエピソードが語っていることは，いかなる境遇，職業にもそれ自体に幸福はなく，そこで不幸をかこつ人々との出会いは，「人生の選択」に寄与しないということである。これがラセラスが「選択」をつづける動機となる。

b.　ラセラスの性格

二つ目の推進力は，彼の性格である。「谷」の中でのラセラスの感情の変化と，イムラックとの対話を見ると，彼がどのような性格の持ち主なのか明らかになる。以下，要点のみ。

「幸福の谷」では，生きる目的をもてず，恵まれた環境を楽しめず，人生に退屈し不満を感じていた。そして人間の幸福について内省する（退屈，不満，内省）。

老教師との対話後，「谷」を出て，広い世間を見聞するという目的を得る。このとき初めて希望を抱き，自分の若さを喜び，活力を感じる。また，自分だけが野望を抱いているという自意識から，自惚れが生まれる（目的，希望，野望，自惚れ）。

ラセラスは外界で活躍する自分の姿を空想し，喜びに浸り，遺産を奪われた娘を空想するまでに至る。ここで彼は内向的な幸福感を抱き，妄想の初期段階を経験する（空想，内向，妄想）。

空想に遊んでいたと自覚したときは，激しく後悔する。そして理性に目覚め，客観的，批判的に「谷」の様子と人間を観察する。ラセラスはこのとき理性による持続的な希望を抱くことができた。しかし目立った感情は示さず，冷静である（後悔，理性，希望）。

イムラックに出会ったときは，師と巡り会えたことを喜び，「人生の選択」を決意する。そして脱出の可能性を確信し，決行の意思を固める。ここでは希望の実現への期待と，知識へのつよい憧れを示している（邂逅，喜び，決意，期待，憧れ）。

出口となるトンネルの掘削中，作業の大変さに一度はあきらめかけたが，イムラックに励まされて，ようやく脱出に成功する。希望の実現に狂喜し，前途に大きな期待をいだく（弱音，激励，実現，狂喜）。

原野を歩く恐怖，初めて見る街，珍しい物への感嘆，驚嘆（恐怖，感嘆）。

その後の旅では，ときに悲しみ，驚き，憤ることはあるが，ラセラスの個としての描写というよりは，期待と失望のくりかえしの中での感情の変化が描かれているといえる。

「谷」の中のラセラスは，人生に退屈する，内省する，自惚れる，妄想を見る，猛省するというような，シリアスな一面があるが，破壊的，自滅的，反社会的というようなつよい否定的な感情をもったことはなく，特に外界を意識してからは，一貫して積極的な性格を示している。また，客観的，批判的に「谷」の様子と人間を観察するなど，理性的で知的な面もある。弱音を吐くことはあったが，最後まで希望を捨てることはなかった。もっとも否定的な傾向は自惚れと妄想であるが，これはテーマの一部である空想にもとづくものなので，なくてはならない。つまり，ラセラスは，「選択」という目標に向かってつねに一途であり，それを妨げる性格は付与されていないのである。

さらに，イムラックと比較してみると，その達観した否定的な人間観を背景にして，ラセラスのきわめて肯定的な人間観が明らかになる。たとえば，イムラックが砂漠の隊商に騙され，金品を巻き上げられた経験を語ると，王子は，「ちょっと待ってくれ。自分に何も利益がないのに，他人を害するような堕落した人間がいるものなのか。人よりすぐれていることを喜ぶのはよくわかる。しかし，そのときのお前の無知は，いってみればたんなる偶然で，お前の罪でもなく，馬鹿だったせいでもない。だから奴らが自分をほめる理由にはならないではないか…」と疑問をぶつける。対してイムラック，「自尊心というものは，細やかな気遣いとはちがい，じつに浅ましい利益をむさぼって喜ぼうとします。嫉妬深い人間は，他人の不幸と比較されなければ，自分の幸福を感じることがありません。奴らは私を裕福だと思って歎き，私を敵にしたのです。私が弱いと知ってよろこび，私を迫害したのです」（第九章）。

ラセラスは一度も「谷」を出たことがなかっただけに，聡明だが，悪徳を知らず，人間の善性を信じている。それゆえ人間性の理解は客観的で公平である。イムラックも初めはそうだったが，二十年の旅の経験と祖国での冷遇で，人生に失望し，透徹した，辛辣な批評を下

すようになった。二人の人間観を分けているのは，人間の善性を信じるか否かである。ラセラスは，確かに無知かもしれないが，人間を信じている。また疑問は疑問として，こだわりなくイムラックにぶつけていく純粋さとひた向きさがある。それがラセラスの中心的な性格なのであるが，それも人間性へのゆるがぬ信頼があればこそなのである。さらに例をあげる。

イムラック，「人生はいたるところ，多くを忍ばなければならない，楽しみの少ないところです」（第十一章）。ラセラス，「人間はそんなに幸少ないと私はまだ考える気になれない。また，もし生き方が選べる（the choice of life）なら，私は日々を喜びにみちたものにできるのではないかと信じる」（第十二章）。

ラセラス，「私がほかの友人たちより不幸なのは，一体どうしてなのか分からない。彼らはいつも変わらず陽気なのに，私自身は落ち着きがなく不安だ。私は自分がもっとも欲しがっていた喜びにも満足していない。交友を楽しむというよりは，自分から逃げるために大勢の陽気な連中にまぎれて暮らしている。自分の悲しみを隠すためだけに，大声を出して，陽気に振る舞っている」。イムラック，「幸せなどどこにもないということに気づくには時間がかかります。それで，自分が幸せになる望みをなくさないために，他人は幸せだとみな信じているのです」（第十六章）。

ラセラス，「しかし，われわれが驚嘆し，尊敬の念をもってその教えを拝聴する賢者は，最大の幸福にいたると考えた道を，ちゃんと自分で選択しているではないか」。イムラック，「自分の生き方をきちんと選択できる人は稀です。人間が現在の状態にあるのは，自分の見込みとは別な，必ずしも自分が望んだとは限らない原因が作用した結果です。ですから，どんな人でも隣人の巡り合せの方が自分のものよりよいと考えています」（第十六章）。

イムラックの人間性の洞察は深い。しかし，それだけに，諦念が色濃い。彼の，人生に幸福はない，今ある自分は偶然の結果にすぎないという観察は，ラセラスの人間の善性への信頼，「人生の選択」への期待と真っ向から反する。それゆえラセラスは師の教えに耳をかさず，自分の期待を述べつづける。彼が師の人間観に共鳴することはないのである。したがって，純粋さ，ひた向きさをいつまでも失わない。そのぶん世間を知らない若輩に映るかもしれない。が，イムラックの諦念を背景にすると，むしろ好もしく思われ，若々しく，愛すべき青年だと，認めないわけにはいかないのである。

読者はこのような「明」「暗」二つの人間観を前にして，イムラックではなく，ラセラスを支持する。そして希望の追求という，ラセラスと同じ目線に立って「選択」の完成を信じる。ラセラスの「選択」を推進する二つ目の力は，彼の純粋な性格と，人間の善性への信頼である。彼は「幸福の谷」で敷かれた軌道を，不幸をかこつ人々との出会いと，純粋な性格と，人間性への信頼ゆえに，止まることなく走りつづける。

4.　希望の質的な変化

この二つの推進力が物語を展開していく過程で，希望の新たな側面が照らし出されている。冒頭に記されていたテーマは，「希望の幻影」を見つづけて，空想に陥る危険を諭すことであった。しかし幸いにラセラスは理性に目覚め，持続的な希望を抱くことができた。この物語で彼が最初になしとげたことは，空想と希望の区別である。

ところが，ジョンソンの他の著作や書簡を見ると，この二つの区別は困難であること，それゆえ空想・希望の消極的な受容を認め，やがてそれが積極的な受容に転化すると解釈できる文章がある。これが物語の理解にヒントを与える。

> われわれは…来し方を思い起こし，来るべき出来事に期待して，存在の空白を紛らせざるを得ない。（*Rambler*: 41, 1750.8.7, III, p. 221）

> 人間はあらゆる慰めを未来にもとめるのがその定めのようである。（*Rambler*: 203, 1752.2.25, V, p. 291）

> 希望は（空想に）つねに裏切られるとはいえ，希望を抱くことは必要である。なぜなら希望そのものが幸福だからである。その失望落胆がいかに頻繁でも，希望がなくなるよりはましである。（*Idler*: 58, 1759.5.26, II, p. 182）

> 希望はそれ自体一種の幸福であり，おそらくこの世が与える最高の幸福である。（*Letters*: 1762.6.8, I, p. 203）

はじめの「来るべき出来事に期待して，存在の空白を紛らせざるを得ない」は，人間の存在に関わる希望の必要性と役割を表している。二つ目は，慰め，すなわち希望を未来にもとめることは，人間の性であり，避けがたいこと。つぎの「希望は（空想に）つねに裏切られる」，「その失望落胆がいかに頻繁でも」は，第一節で見たように，空想と希望は見分けがつかないこと，それゆえ人は希望に騙されやすいこと，しかしその価値は否定できないことを表し，消極的な受容を認めるものである。最後の文は，そのような二面性のある希望を，「この世が与える最高の幸福」（the chief happiness which this world affords）と認め，積極的に受容すべきことを表している。希望はわれわれを裏切りやすく，失望落胆を免れないかもしれない。しかしそれでも新しい希望を探し，追い求めることでしか人は幸せになれない。人

間は希望によって生きる。ゆえに希望は永遠に繰り返されるのである。

「谷」の中でラセラスが最初に行ったことが，空想と希望の区別であったとはいえ，上記の引用を見れば，ジョンソンにはそれは不可能だという意識があったはずで，少なくとも希望の勝利で作品を結ぶことはできなかった。また終章を見ても，二つが明確に区別されているようには読めない。したがって，作者に残されている選択肢は，空想・希望の消極的な受容ではなく，積極的な受容である。それを確認できる箇所が，終章近くのネカヤとラセラスとのやりとりにある。

> 「人生なんて」とネカヤがいった，「変化を待ち望む気持ちがなければ，誰も幸せになれないところです。変化それ自体は大したことがなくても。でも，いったん変化を味わったら，つぎに望むことは，また変化。世界はまだ見尽くしていないわ。明日はまだ見たことがないものを見せてちょうだい」
>
> 「いろいろあるということが」とラセラス，「満足するためには必要なのだ。幸福の谷でさえ，いつも奢侈の連続で，私はうんざりだった」（第四十七章）[4]。

ネカヤは時としてイムラックを代弁するかのような否定的な見解を述べつづけていたが，この場面の明るい口調は，いっさいの否定的な要素を払拭し，希望に終わりがないことをむしろ楽しんでいるという理解を促す。ラセラスの返答はそれに呼応するもので，終わりのない希望を肯定的に受け入れていると解釈できるのである。希望に関する冒頭の重苦しいテーマの宣言から，積極的な受容への展開，これが最後に現れるテーマである。終章の解釈はこれにもとづかなければならない。

「結末のない結末」[5] と題された終章（第四十九章）は，他の章に比べて極端に短く，ラセラスたちの将来の夢を描いた後で，このような文章で唐突に終わる。

> 彼らが胸に描いたこのような願いは，どれ一つ実現されることはないと，彼らはよくわかっていた。彼らはこれから何をするべきか，しばらく話し合ったが，決まったことは，ナイル川の氾濫が終わったら，アビシニアに帰ろうということだった。

4） 原文は以下の通り。‘Such,’ said Nekayah, ‘is the state of life, that none are happy but by the anticipation of change: the change itself is nothing; when we have made it, the next wish is to change again. The world is not yet exhausted; let me see something tomorrow which I never saw before.’
‘Variety,’ said Rasselas, ‘is so necessary to content that even the happy valley disgusted me by the recurrence of its luxuries.’
この後でイムラックは修道院の生活について語り，その次の章で魂の本質を論じる。この二つの位置づけは後編で試みる。

5） 原文は “The conclusion, in which nothing is concluded”。

読者はラセラスの「人生の選択」が完成せず，物語が完結しなかったことに戸惑う。ここまで同じ目線でラセラスを見守り，信じてきた読者には当然のことかもしれない。しかし主人公たちが置かれている枠組みは変わっていない。彼らは「追いもとめる幸福」を追求しつづける。したがって，読者の戸惑いの原因は，一方には，結末が読者の期待を裏切ったことにあるが，より本質的には，読者が唐突な結末に立ち会い，ラセラスたちの将来を想像したことにある。永遠に繰り返される希望を，彼らだけでなく，自分自身の茫洋たる現実として受けとめたことにある。「人生の選択」という虚構から覚めて，不意に現実を見せられたところに，本当の戸惑いの原因が存在するのである。今まで完成を信じていた読者にとって，そこに一抹の暗さ，遣る瀬なさが滲むことは否定できない。

しかし，「胸に描いたこのような願いは，どれ一つ実現されることはないと，彼らはよくわかっていた」という文を見れば，ラセラスたちが希望の二面性を学んでいたことがわかる。彼らが失望落胆することはもうないであろう。彼らは一つ賢くなった。それは，「幸福の谷」ではなく，アビシニアに帰ろうと決心したことにも表れている。過去も未来もない古巣にもどるのではなく，アビシニアに帰って，今度は，おそらく，祖国に貢献することを考えて生きていく。そういう印象を結末は与えている。しかし，それはやはり軌道を走りつづけることなのである。希望は永遠につづく。「結末のない結末」は，物語のテーマを的確に表している。

5. 作品の評価

「幸福の谷」は，すべて満たされているが，過去も未来もない，喜びが喜びになり得ない，閉塞した空間であった。ラセラスが「谷」を脱出して，希望を追いもとめることは，物語の自然な展開である。しかし，「私はお前が見てきた世界を見たいのだ。…その上で慎重に自分の『人生の選択』をしたいのだ」（第二十章）と，希望が「人生の選択」という名を得たとき，おそらく生涯で一度きりの，人生の一大決心と解釈されてしまった。イムラックとの対話から明らかなように，また「幸福の谷」で示唆されていた，幸福の因は環境それ自体ではなく，環境への肯定的な取り組み方にある，という考察からもわかるように，そのような「人生の選択」は，実現の可能性がない，希望の名前を騙った空想の産物であったといえる。しかし，読者は，「谷」の環境に疑問をいだく主人公に，自分と同じ価値観を見いだして，「選択」の成功を信じた。つまり読者も空想を信じたのである。

イムラックの案内によるラセラスの旅は，現実を知る旅であった。が，ラセラスは，不幸な人物との出会いと決して失わない希望から，「選択」の完成をいつまでも信じる。また，イムラックの悲観的な人間観にくらべ，ラセラスの肯定的な人間観は好もしく，読者は最後ま

でラセラスを支持する。ところが，終章近くで，彼らは読者より一足先に希望の二面性を学び，終わりのない希望を受け入れていたのである。人生の一大決心としての「選択」は，終章ではその意義をうしなっている。

ここに『ラセラス』の文学的なトリックがある。終章は，ラセラスの「選択」が失敗し，作品が未完に終わったという印象をたしかに与える。しかし希望に終わりがない以上，物語が未完に終わることは避けがたい。それは『ラセラス』の欠点ではない。終章が読者の期待を裏切ることは，「幸福の谷」が構想されたときから，必然的に用意されていた文学的なトリックである。したがって，『ラセラス』の文学作品としての成否は，終章の成否にかかっている。『ラセラス』は「空想と希望」を描く。そして，未完に終わることで，最後に読者を突き放し，希望の本質を実感させる作品なのである。『ラセラス』の構造的なデザインは，この一点に集約され，全うされている。

引　用　文　献

Rasselas and other Tales (The Yale edition of the works of Samuel Johnson, XVI, 1990)
The History of Rasselas, prince of Abissinia (Penguin Classics, 2007)
The Rambler (The Yale edition of the works of Samuel Johnson, III, IV, V, 1969)
The Idler and Adventurer (The Yale edition of the works of Samuel Johnson, II, 1963)
The Letters of Samuel Johnson (Clarendon Press, Oxford, 1992)

参　考　文　献

Karounos, Michael, *Rasselas* and the Riddle of the caves: Setting Eternity in the Hearts of Men, The Age of Johnson 16 (AMS Press, Inc. New York 2005) pp. 39–58
Kolb, Gwyn J.　The Structure of *Rasselas*, (PMLA, 66(1951) pp. 698–717)
Lockhart, Donald M.　"The Fourth Son of The Mighty Emperor": The Ethiopian Background of Johnson's *Rasselas*, (PMLA, 98(1963) pp. 516–28)
Park, Catherine N, *Rasselas* and Conversation History, The Age of Johnson 1 (AMS Press, Inc. New York 1987) pp. 79–109
Parker, Fred, The skepticism of Johnson's *Rasselas*, The Cambridge Companion to Samuel Johnson (Cambridge University Press 1997) pp. 127–142
Suarez, Michael, SJ, Johnson's Christian Thought, The Cambridge Companion to Samuel Johnson (Cambridge University Press 1997) pp. 192–208
Tomarken, Edward, Perspectivism: The Methodological Implications of "The History of Imlac" in *Rasselas*, The Age of Johnson 2 (AMS Press, Inc. New York 1989) pp. 262–290
Weinbrot, Howard D., Johnson's *Irene* and *Rasselas*, Richardson's *Pamela Exalted*: Contexts, polygamy, and the Seraglio, The Age of Johnson 23 (AMS Press, Inc. New York 2015) pp. 89–140

Summary

Samuel Johnson——On *Rasselas* (1)——

ISHII Yoshihiro

The first part of my essay is to suggest an overall framework for interpreting the tale by analyzing its dynamics that prompt Rasselas to continue with his 'choice of life.' The point will explain how the readers position themselves with him and keep watching his attempts to the last chapter. This will also clarify what factor of the work should be most rated.

Particularly important for my argument is to examine the talk about happiness between the prince and his old teacher, and to trace the prince's mental changes in the Happy Valley after that. It demonstrates that by the time Rasselas finally escapes from the Valley, he has been characterized as a pursuer of hope by the name of the 'choice of life.'

My next argument is on two designs that help to propel the story forward. One is a biased, negative description of people from different conditions of life, and the other is Rasselas's quite positive view of human nature. The effects of them always let him have another try after a failure in his 'choice.' And those designs result in making the subject matter clearer by introducing the key aspect of hope: hope that he should accept as "the chief happiness," no matter how delusive it might be.

It is true that the last chapter leaves the readers confused when it ends without his final success, but my argument over the framework shows that the 'choice' is permanent, and then that more importantly the major cause for the confusion stems from the sudden ending of the story that makes them glimpse the reality of hope. This is a literary trick that we should highly rate about *Rasselas*.